

痴漢一発

東京の山手線の電車内でおれは、前に立っている女の背後に立った。三十代後半のその女は、いかにもキャリアウーマンという雰囲気をも全身から漂わせている。時刻は会社から帰る時間のラッシュアワー。東京のラッシュアワーなんて、夜遅くまで続いているよ。

夏だから軽装のその女の尻に、おれは軽く手のひらを当てた。女が感じるか、感じないか位だ。すると、都合よく電車が揺れて人が一方向に倒れ掛かる。

その方向が女の尻のほうだったから、しめたものだ。おれは、むんずと女の尻をつかんでやった。しばらく、おれの後ろから多くの乗客が、おれを押ししていた。

その女の尻は、柔らかくて心地よかった。だから、痴漢はやめられないのだ。女の髪は短めで、顔も人に命令しているような顔だが、それに反してスカートを履いている。そのスカートも薄い布なので、パンティの感触まで味わえた。女の身長は平均よりも高め、だが、百七十五センチのおれよりは遥かに低い。

女は、おれが尻をつかんだ瞬間、身をくねらせた。すかさず、おれは女の足の上に右手を入れて、その女のマンコのあたりに指をすべらせて、ぐっとなぞってやった。車内は満員で、女の前に座っているのは目をほとんど閉じた初老の男性サラリーマンだ。

また、後ろから多くの人がおれを押してきたので、おれは左手で女の左の乳房をムンズとつかんで、そのまま揉みしだいた。

おれの両手は、女のマンコと乳房をそれぞれつかんでいた。

そのまま三十秒位、時間が経った。女の顔は見えないが、悔しそうな表情をしているに・・・お、電車の窓ガラスに女の顔が見える。さっきまでの威厳のありそうな顔つきから、快感をこらえている女の顔に変わっている。

この女、感じているんだ。だから、痴漢はやめられない。

そうとも、世間ではなんといおうと、おれはEことをしているんだ。

その女の乳房と尻は、普通より小さめだったが弾力はある。

女は、おれの両手に大事なところを握られて気持ちいいのを我慢している。

電車内で悶え声など、上げられるわけもない。

一分もそのままにしていると、おれの後ろの乗客が元の体勢に戻ったので、おれはすばやく両手を外した。女は窓ガラスに映っているおれを見つめたが、すぐに眼をそらした。

おれはサングラスを掛けて、口にはマスクをしている。平たい帽子をかぶり、鼻の下に付け髭までしている。

まだ、する事があった。おれは、勃起したものをズボンから取り出すとシャコシャコと右手でしごいて、どくっと女のスカートに射精してやった。

この動作は平静な顔や態度をしてやらないと、いけない。

物事にはなんでも、慣れというものがある。過去に数十回の体験を持つおれは、顔色一つ変えずに電車内で女に射精することができるのだ。

女のスカートの尻には、おれの放った白い液体が大量に付着していた。

おれの両隣の男性サラリーマンは、携帯電話でネット閲覧でもしているらしく、少しもおれがやった事に気がつかなかった。

電車は大森というところに、停まった。おれの精液をスカートにつけた、そのキャリアウーマンは電車を降りた。

と話す霧下才一(きりした・さいいち)の話を、私は満足感を持って聞いた。これで、いい。これで、いいんだ。

霧下才一は、月に四回から八回は痴漢をしていた。あまり回数を増やすと、捕まってしまうと彼は言う。私は、霧下才一の高校の同級生で、福岡市から東京に出て就職した。

霧下君は、最近、上京してくる。というのも、彼は今も福岡市に住んでいるという。

霧下君は、

「痴漢の本場は、やはり東京だね。日本でもっとも、やりやすいよ。福岡市で痴漢の達人になれば、東京は痴漢天国だ。おれは、福岡市の西鉄バス内とかでも鍛えてきたからな。

それともうひとつ、見て見ぬ振りをする東京の人間。これも、やりやすい原因のひとつだろう。」

と都内の喫茶店で堂々と、私に語った。

東京というところは、JR と私鉄が発達したために、バスはそれほど盛んではない。その結果、大分部分の人は、電車で通勤する。その中でも埼京線という路線がもっとも痴漢が多い、といわれているわけだが、これは訴える女性が最も多いと言う事も、できるかもしれない。

霧下君は、金にゆとりのある生活を送っているらしい。が、飛行機ではなく新幹線で東京まで来る。月の半分は、東京で暮らしているらしい。新幹線の車内でも痴漢をするらしい。

彼は、こう語る。

「新幹線の自由席で女の隣に座れば、女が降りるまで痴漢し放題だ。女の到着駅では、とめてやるのがエチケットだけどね。特に女が窓際で、横一列に誰もいない場合は、最高度な状態だ。パンティの上からではなく、直接マンコに指を入れるのは当たり前で、時々、新幹線の女客室乗務員が歩いて通り過ぎる事もあるが、気がつかないよ。」

私は普通のサラリーマンを続けて、もう三十歳だし、霧下君も同じ年齢だ。私は、

「霧下君。就職した事はないのか。」

と聞いてみると、

「いや、ないね。又、おれみたいに痴漢の常習者が、万一、捕まったら会社も迷惑するだろう。まあ、おれは今まで一

度も捕まってない。痴漢は申告罪なんだ。女が訴えない限り、捕まらないよ。」

と外国煙草の煙を吹かしながら、そう答えてくれた。

「君が痴漢するようになった、動機ってなんなの？」

「ああ、それは色々あるよ。ただね、一つは親父だ。おれの親父は地方公務員だったが、仕事中にアダルトサイトを閲覧してクビになった。母には退職の理由を言わなかったらしいけど、高校を出てアルバイトをしているおれには、

「オー。父さんはな、アダルトサイトを仕事中心に見てクビになったんだ。おまえは、そうならないよう注意をしろよ。親子なんて、よく似ているのだから。」

と母のいない時に、おれに語ってくれたよ。」

「そうだったのか。でも、それなら・・・。」

「痴漢とかもしないように気をつけるはずだ、ということだね。でも、おれは親父の敵討ちみたいな気持ちもあるんだ。」

「なるほどね・・・。」

私は、分かったような、よく分からない気持ちになった。

それで、次の質問をした。

「君が最初に痴漢した女性は、どんな感じだった？」

霧下才一は、眼をキラキラと輝かせると、

「高校の時の教師だよ。英語の教師だった。おれは、英語が苦手だったから、あやうく落第しかけたけど、その時もその新任の女教師は冷淡だった。私大出で、金持ちの娘だという評判はあったね。」

なんかモデルみたいに背が高くて、髪は長いし、それで結構美人顔なんだ。

落第しないための授業に出たから、なんとかあったけど、学年で最低の英語の成績だったらしく、その英語の女教師はおれを馬鹿にしたような態度でその後も接した。

高校を卒業してある日曜の午後、福岡市のある地下鉄の駅でおれは、その女教師を発見した。彼女とおれは視線が合ったが、向こうはおれを無視したよ。その女教師の隣にはハンサムな若い金髪の男性が立っていた。染めているんじゃないよ、白人だよ。

おれと彼等は二メートル位しか、離れていない。電車が来た時は、同じ車両に乗り込んだ。座席は満杯なので、それぞれ吊革につかまって立つ。

おれは、女教師の後ろに立ってしまったんだ。彼女の左側に金髪の白人男性が立っていた。その女教師とおれの身長は同じくらいなんだ。金髪野郎は、おれより、あと五センチは高い。

電車は発車した。おれは下に視線を向けると、女教師の尻に眼が行った。薄手のスカートは、大きくふくらんでいた。意外と、巨尻なんだなとおれは思った。それが時々、ぷるぷる、と左右に揺れた。高校時代の屈辱をおれは、はらしたくなった。

右手を女教師の尻に当たるかあたらないか、という程度に接触させる。電車が揺れた時、おれはグイッと女教師の巨尻を掴んだ。ピクンと彼女の肩が揺れると、顔だけ振り向けておれを見た。

あっ、という顔を見ると女教師は何も言わなかった。自分の教えた生徒に痴漢されるなんて、という思いが顔に現われていた。

おれは再び、彼女の尻をいやらしく撫で回した。柔らかく、ぷるぷるした彼女の尻の肉の感触に、おれは勃起していた。それでズボンの前に布を突っ張らせているモノを、彼女の尻の割れ目の辺りに押し付けた。ズシ、と彼女の尻の肉は、おれのズボンのふくらみを受け入れた。

尻の割れ目のあたりと思っていたが、それは女教師のマンコの割れ目だったのだ。ガタン、ゴトン、ガタン、ゴトンと電車が揺れる度に女教師の巨尻もおれの勃起物を受けたまま、揺れている。

(空いた手が、もったいない。)

そう思ったおれは、両手を女教師の背中から、たっぷりと盛り上がった乳房に当てて、柔らかく揉んでやった。何かに耐えている感じを彼女の後姿は、表現している。背が高いので、座っている乗客には彼女の胸の位置は高くて見えないのだ。

女教師の隣の白人男性も背が少し高いためか、おれの動きに気がつかなかった。それから十分ほど、おれはズボンの上からだったけど自分の勃起したモノを女教師の後ろから彼女の割れ目に当てていた。おれは自分のイチモツから彼女のマンコの割れ目が、おれのモノを啜る様に動くのも感じた。

(なんだ、おれのチンコを欲しがっているようだな。)

とおれは思ったので、天神駅に着いて車両を降りた女教師
に、

「先生。お久しぶりです。」

と声をかけた。白人共々、おれを振り向くと、

「あら、霧下君ね。久しぶりだわ。」

と顔を赤らめて返事をした。彼女の視線は、おれの股間に
走っていた。おれは、まだ勃起させていたのだ。それを女
教師、幾野育子(いくの・いくこ)は、おいしそうに眺めて、

「よかったら、お茶でもしない？」

とおれを誘う。

「いいですよ。落第しそうな僕を助けてくれたのは、先生
です。」

「まあ。当たり前的事ですよ。教師として。」

と、いかにも教師風の語調で幾野先生は、答えた。となり

の白人は、

「ミーは、どうしますか？」

とオズオズと幾野育子に聞く。

「一緒に行きましょう。」

と育子が答えると、

「オー、イエース。」

と納得した。

三人で天神のレストランで食事して、地上に出るとタクシ

ー乗り場に女教師はおれたちを引っ張って行った。

タクシーでは、おれと女教師が後部座席で、おれが運転手の後ろ。白人は助手席だった。幾野育子は、

「糸島のラブホテルに。」

と教師らしく命じた。

「糸島のラブホテルって、いくつがありますよ。」

「じゃあ、一番遠いところで、いいわ。」

「わかりましたー。」

タクシーは、快走し始めた。

すぐに幾野育子は、おれにピッタリと身を寄せると、

「今、就職しているの？」

と、さり気なく聞く。

「いえ、フリーターしてますよ。」

「そうなの。最近は就職が難しいものね。なんなら、父の会社関係で働けるようにしてあげてもいいけど。」

おれは、驚いた。さっき、痴漢をしていたおれに・・・職の世話まで考えてくれるなんて。

「それは、ありがたいですね。ぜひ、お願いします。」

「うん、任せてね。父は四十位、会社を経営しているの。東京支店が三十もあるのよ。」

「ええ、もう、どこでも構いません。」

育子は、おれの耳に両手を当てて前の人間に聞こえないように、

「さっきの、あなたのチンコ、よかったわ。これから行く糸島のラブホテルでナマで挿入してね。」

と囁いた。その手をわざとらしく滑らせると、育子はおれの股間にズボンの上から触った。すぐに、元の位置に女教師は手を戻したが。

タクシーは、国道 202 号線を西に走っていく。今は糸島市となったが、つい最近までは糸島郡だった。JR の前原駅近辺が、そこそこ発達した町ではある。

糸島市に入ると、国道 202 号線に沿ってレストランなどの店がずらりと並んでいる。途切れるところもあるが、昔はただの空き地だったのだ。やがて、右手に海が見えるようになる。それは博多湾という内湾で、小さな島もところどころに見えてくる。

幾野育子は、おれの右にある窓ガラスから見える海を見ながら、

「海水浴の季節が過ぎたら、楽しめるわ。」

と謎のような事をおれに囁いた。今は八月だけど、盆を過ぎれば海水浴客は少なくなる。

育子は自分の右足の太ももを、おれの左足のふとももに押し付けてきた。柔らかい感触が、おれの脳に股間に血液を送るように指示させる。それで、少し勃起した。

前の助手席で、

「ニホンノ、イナカ、イイデッスネー。」

という声がした。運転手は、

「いいでしょう?でも、だんだん田舎ではなくなっていくてますね。」

と話した。

育子の右手が伸びて、おれの股間のふくらみに触ると又、元に戻った。彼女の顔を見ると、満足そうな笑みが浮かんでいる。

タクシーは、ラブホテル「シーピンク」に到着した。国道202号線の右は、海岸、左は小高い丘がある、その丘の上に「シーピンク」がラブホテルらしく立っていた。タクシーを降りると、潮風が鼻にきて、海は丘の上から見晴らせる。深い青色の海だ。

駐車場には車が二台、先客らしく停まっていた。運転手は、

「帰りのご用命も、ぜひ、お願いします。」

と車の中から幾野育子に頼みかけた。

「あら、ひまなんじゃない?この辺で待ってたら。」

と育子は身を少し屈めて答える。

「いえ、なんとか時間を潰します。」

「そう、じゃあ、好きにしておいて、いいわ。」

「ありがとうございます。」

深々と、運転手は頭を下げた。

おれたち三人は、幾野先生を先頭にラブホテルに入った。

受付は農家の青年風の男性が、野良着姿でチェックインの
手続きをした。

「すみません、こんな格好で。いつもの人が急用で福岡市
に行ったもんだから、畑仕事をしていたオレが呼び出され
て、こんな格好しとるとです。」

と言うなり頭を下げた。幾野は、

「いいわよ、気にしなくて。ラブホテルの受付に農家の作業着というのも面白いわ。」

と賛美した。

鍵を幾野が受け取って、先に歩いて行った。受付から最も遠い部屋、その部屋が海がよく見える部屋だったのだ。

育子は、全員部屋に入ると鍵をかけた。それから、おれに歩み寄るとキスを長くした。